（一）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

大越愛子は、近代以前の社会では「「恋愛」、「性愛」、「結婚」は分離したものであった」と断言している。だが、私たちは、結婚式で「お二人はめでたくゴールインされ」などというスピーチを聞くことがある。この「ゴールイン」という言葉は、恋愛の目的が結婚だという認識があることからきている。ならば、少なくとも近代以降を生きる私たちには、「恋愛と結婚が結びついている意識」があるということだ。

山田昌弘によれば、そもそも恋愛と結婚は矛盾している。結婚にふさわしい相手を好きになるとはかぎらないし、結婚後に配偶者以外の人を好きになることもありえるからだ。結婚相手にふさわしくない相手に恋愛感情をもってしまえば「階統的秩序」を乱すことになるし、夫婦以外の人に恋愛感情をもてば「家族的秩序」を乱すことになるだろう。そうして、完全に自由な恋愛は、社会にとって望ましい結婚制度をホウカイ[1]させる危険性をもはらんでいると見なされるようになる。人が好き勝手に自分の感情に基づき他者を好きになっていては社会が不安定なものになる。安定的な社会のためには、恋愛を結婚に見合うものにする必要が出てきたのである。

そこで、社会は三つの戦略を用意する。一つは、［ a ］。例えば、結婚は結婚として維持しながら、花街で恋愛をしたり妾（愛人）を囲ったりするスタイルである。現在では公然とこの戦略を使うことは社会的に認められにくくなったものの、かつてはかなり許容されていた。

二つ目は、恋愛を抑制する戦略である。例えば、宗教の力を使って恋愛感情そのものを罪悪としてしまう方法が一つの例としてあげられるだろう。

最後に、［ b ］である。これこそがロマンティック・ラブ・イデオロギーと呼ばれるものだ。十八世紀から十九世紀にかけて西欧に誕生し、日本でも高度経済成長期以降に普及したとされる。ロマンティック・ラブ・イデオロギーは、もともとは矛盾する恋愛と結婚を結びつけて、結婚相手としてふさわしい相手に抱く感情を恋愛感情と規定する。すると、結婚相手としてふさわしくない相手との関係は、偽物の恋愛として排除され、ふさわしい相手との関係が正しい恋愛として推奨されることになる。例えば、同性同士のカップルやあまりにも低年齢同士のカップル、社会的に生活していけない無職同士のカップルなどは、社会的に認められにくくなる。年齢的にも社会的にも成熟していて、安定的に暮らしていけるような相手との交際が推奨されるようになる。井上俊や柳父章は、このイデオロギーが、自由なはずの恋愛を結婚という社会制度に組み込むことで、「恋愛統制の機能」を発揮するようになり、「日本の現実を裁く規範」になっていったと述べている。ロマンティック・ラブ・イデオロギーによって、恋愛は結婚に結びつくべきだと認識されるようになり、このイデオロギーが流布するにつれて、近代の日本では、恋愛の目的は結末である「結婚」にあったし、そうでなければならなくなったのである。したがって、雑誌等でも恋愛物語の結末（特に結婚）は重要視されている。

また、恋愛物語というと、童話であれ小説や映画であれ、主人公が理想の相手と結ばれる（あるいは別れる）エンディングがクライマックスとなる。童話としてあまりにも有名なシンデレラは継母とその連れ子である姉にいじめられているが、最後は王子に見初められて結婚する。このストーリーは、シンデレラストーリーという言葉に表れるように、その他のさまざまな物語の型となっている。『美女と野獣』にしろ『白雪姫』にしろ『眠れる森の美女』にしろ、やはり結婚で話はクライマックスを迎える。ロバート・ブレインは、結婚を「未来を約束するにもかかわらず、物語の始まりでなく終わり」と断じている。逆に、悲恋に終わる物語も、『人魚姫』なら王子との恋を諦めて海に身を投げて泡になるシーンが、（童話ではないが）『ロミオとジュリエット』なら二人が周囲に恋を反対されたことで結果として死んでいくシーンが、やはりクライマックスとなる。

つまり物語論の観点から考えれば、「結末」が非常に重要なのである。ポール・リクールは自らの解釈学をプロップらの物語記号論を補完するものと考えていることから、彼の物語論を参照してみよう。リクールによれば、物語とは因果的連鎖で結ばれた筋が「完結」するものである。物語が「AのゆえにBが」という因果的な連鎖構造をとるということは、物語は結末に到達するために進むと解釈してもいい。物語中のすべてのエピソードは結末に結びつくための伏線なのである。したがって、物語の調和や統一性は結末によって作り出されるという。

言い換えれば、一般に物語は「初め・中間・終わり」から成り立ち、「終わり」に到達するために進展しているともいえる。すなわち終わりという一点に収束していくのである。ある意味では初め・中間は終わりのための伏線であって、「終わり」「結末」は物語上の［ c ］となる。

したがって「結末」「終わり」とは、物語にとっても最も重要な要素であり、恋愛物語にとって「結婚」や「別れ」といった「結末」が重要なのである。

＊実際に一九七〇年代の恋愛物語では結末部分が重要視されており、雑誌記事を調べてみると誌面の多くを結婚や失恋の記事が占めている。特に、結婚記事が二九・一八％を占めており、出会いから恋愛期間中そして結婚（もしくは別れ）すべてを描いた「完全な物語」も九・一八％ある（従って、結末にふれているのは、三八・三六％となる）。具体的な記事の内容を見ても結婚の重要性はよくわかる。ある女性誌では次のような記事がある。

ある女性が、恋人である彼と高校で知りあい、一緒に通学したり映画を観たりして、楽しい交際をする。（中略）高校卒業後には短大にいくつもりだったが、彼が家業を継ぐことになったので、彼に合わせて就職することにした。

そのうち結婚を意識するようになるが、彼はまだその気がない。[2]アセる彼女は、「本当に別れようかと思いました。でもダメでした。この人と別れたら私は一生後悔すると思ったのです。そして彼が一人前になるまで待とうと思いました。」というのである。最終的に二人は結婚することになり、彼女は「本当によかったと心の底から言えます」と満足げな言葉で締めくくる。（一九七〇年代）

イ

しかし、一九九〇年代そして二〇〇〇年代における恋愛物語での結末部分――結婚、別れ・失恋――は弱体化している。雑誌記事を調べてみると、九〇年代では、別れ一・五四％、結婚二・〇一％で、合わせて三・五五％、二〇〇〇年代では別れ二・〇一％、結婚一・一二％でこちらも合わせて三・一三％にしかならない。具体的な記事の内容を見ても、「占いでいつ結婚するといいか」といった軽い内容が目立ち、クライマックスとして描かれていない。

ロ

物語論やイデオロギーの観点から見て大切な結末が、そこでは描かれていないのである。言説上だけでなく、実際の調査でも同様の結果が出ている。大橋照枝は、「［　d　］」と考える二十代と三十代前半の女性たちが一九七二年で四割を占めていたのに、九〇年では二十代女性で五％弱、三十代前半で九％に下がったことを指摘している。このことは恋愛言説と実際の意識の関連を裏づけているだろう。

ハ

したがって、少なくとも一九九〇年代に[I]「恋愛」は死んだことになる。もちろんそれはかつて「恋愛」という言葉で意味していたものを指している。

ニ

一九七〇年代ではリクールの議論やロマンティック・ラブ・イデオロギーが目指すところに合致して、結末は恋愛物語の目的だったといえるだろう。しかしいまや、結末が目的でない。では、九〇年代以降の恋愛物語の目的はどこにあるのか。目的を探るために、現代の雑誌記事で見られる特徴を検討したい。

ホ

一つには、現代の雑誌記事は物語論でいうところの「中間」、すなわちプロセスを多く描いていることがあげられる。例えば全体の記事に対して「魅力」「アプローチ」「セックス」の記事で半分を占める（一九九〇年代は五四・二％、二〇〇〇年代は四九・〇％）。プロセス部分が膨張し、結末に収斂（しゅうれん）していかない――そのようなものを物語と呼んでいいなら――拡散した物語なのである。

ヘ

もう一つには、「軋轢（あつれき）」や「別れ・失恋」に関する記事が少ないことである。「魅力」「アプローチ」「セックス」は恋愛の楽しい部分であり、「軋轢」「別れ・失恋」は恋愛の苦しい部分だと考えるならば、恋愛の楽しい部分は強調され、苦しい部分はあまり描かれない傾向にある。記事内容は享楽的なものに偏っているといえる。

以上の二点から、目的は「プロセスを重視すること」「そのプロセスからなるべく多くの楽しさを抽出すること」だと考えられる。

[II]これを傍証するために、《挿話的モチーフ》について、簡単にふれておきたい。例えば、雑誌記事では、恋愛相手に対する最も効果的な「アプローチ」方法は、好意をあからさまに伝えるのではなく「さりげなく」「におわせる」こと、あるいは、相手が「アプローチしやすい状況を作る」といった間接的な行動だとされている。直接告白するより「好意をにおわせる」ような不確定なやり方が読者の支持を得ているならば、彼らはアーヴィング・ゴフマン流の相互行為儀礼に基づき、人間関係を完全に決定づけず曖昧（あいまい）なままに保持することで、傷つけ合わないような距離を作っているといえる。しかし、重要なことは、曖昧な関係を安全地帯として利用する以上に、そのアプローチ自体をゲームとして積極的に楽しみさえしていることである。ゲームの楽しさは偶発性によって左右される。恋愛でも結果がすぐわかってしまうような確定した関係では、駆け引きという楽しみが少ない。恋愛対象と曖昧な関係を続けることで、恋愛のプロセスからなるべく多くの楽しさを引き出すことができるのである。実際に、雑誌記事の他の部分でも「友達以上恋人未満が心地よい」という言説が非常に多く、注目に値する。

あるいは、「魅力」の具体的内容を見てみよう。異性の魅力に関しては、一九七〇年代も九〇年代以降も伝統的性役割に沿った「男らしさ」「女らしさ」があげられている。だが九〇年代以降には新しく加わった傾向が存在する。例えば、話が合う、趣味が合う、ノリが合う、価値観が合うなどが新たな魅力としてあがっているのである。それらは「感覚的なものの類似」とまとめることができよう。この傾向は対外的条件を重視しない。つまり「恋人にするなら同伴して恥ずかしくない人」という条件を重視しないのである。むしろ、感覚という個人的な条件を重要視することで、恋愛当事者と外部世界とのつながりを断ち、恋愛を社会に対して閉ざしたものにしてしまう。また、感覚の類似したパートナーを得れば、恋愛関係内部でも、コミュニケーションが比較的スムーズであることが予測されるので、よけいな軋轢は少ないだろう。すなわち、「魅力」言説から浮かぶ新しい恋愛関係は、外部でも内部でもコミュニケーションの努力が最小限ですむ楽な関係なのである。そこでは恋愛の苦しい側面――嫉妬（しっと）や孤独、コミュニケーションをとる困難さ――を経験しないですむ。新しい「魅力」は、恋愛を楽しいだけの安全な小宇宙に変容させることができるのである。

先のわからない「曖昧な関係」によってなるべく駆け引きを長く楽しみ、「似た者同士」という安全な小宇宙で楽しむことが目指される。つまり、プロセスのなかからできるだけ長く、そして多くの楽しさを抽出することが「目的」だと確認できるだろう。

（谷本奈穂『恋愛の社会学』による）

注
大越愛子…日本の哲学者（一九四六～）
山田昌弘…日本の社会学者（一九五七～）
井上俊…日本の社会学者（一九三八～）
柳父章…日本の翻訳語研究者（一九二八～二〇一八）
ロバート・ブレイン…オーストラリア生まれの人類学者（一九三三～）
ポール・リクール…フランスの哲学者（一九一三～二〇〇五）
プロップ…ウラジミール・プロップ。旧ソヴィエトの昔話研究者（一八八五～一九七〇）
大橋照枝…日本の社会学者（一九四一～二〇一二）
アーヴィング・ゴフマン…アメリカの社会学者（一九一二～一九八二）

問一 空欄 a b に入る語句として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、解答欄にマークせよ。

イ 性愛と結びつかない結婚を許容する戦略
ロ 恋愛と結婚の優先順位を変える戦略
ハ 自由な恋愛と性愛を推奨する戦略
ニ 恋愛と結婚を結びつける戦略
ホ 恋愛と結婚を分離する戦略

問二 空欄 c に入る漢字二字の語を、＊印以下の本文の中から抜き出して、記述解答用紙に楷書で記入せよ。

問三 傍線部1、2の片仮名の部分を漢字に直して楷書で記述解答用紙に記入せよ。

問四 空欄 d に入る文として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ なんといっても女性の幸福は恋愛にあるのだから、自由な恋愛をした方がよい。
ロ なんといっても女性の幸福は恋愛にあって、結婚することではない。
ハ なんといっても女性の幸福は結婚にあるのだから、結婚した方がよい。
ニ なんといっても女性の幸福は結婚にあるが、恋愛するのは結婚が目的ではない。

問五 傍線部Ⅰに「「恋愛」は死んだことになる」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 「結婚」や「性愛」と区別して、「恋愛」自体を本質と考える、近代的な「恋愛」は消失した。
ロ 「結婚」につながる「恋愛」や、失恋や別れを大事なことと捉える、近代的な「恋愛」は消失した。
ハ かつて分離していた「性愛」を「恋愛」や「結婚」と分かちがたく結びつける、近代的な「恋愛」は消失した。
ニ 家族主義的な「結婚」につながる「恋愛」を否定し、精神的自由を謳歌する、近代的な「恋愛」は消失した。

問六 次の文が入る箇所として最も適切なものを本文中の イ ～ へ の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

つまり、一九七〇年代の恋愛物語は、ロマンティック・ラブ・イデオロギーやリクールの物語論と合致して、結末部分が重要であるのだ。

問七　傍線部Ⅱ「これを傍証するために、《挿話的モチーフ》について、簡単にふれておきたい」とあるが、これ以降の本文で展開される「結末」と「プロセス」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　九〇年代以降の恋愛物語が「結末」より「プロセス」を重視するようになったことを明らかにし、その「結末」の変化について述べている。

ロ　九〇年代以降の恋愛物語が「結末」より「プロセス」を重視するようになったことを明らかにしたが、「結末」がはたしてどのようになったのかは述べていない。

ハ　九〇年代以降の恋愛物語が「結末」より「プロセス」を重視するようになったことを明らかにし、物語が拡散して完結させられなくなったことを述べている。

ニ　九〇年代以降の恋愛物語が「結末」より「プロセス」を重視するようになったことを明らかにしたが、恋愛のゲームとしての楽しさが持つ意味については述べていない。

問八　本文の趣旨と合致する最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　昔話の『白雪姫』などがそうであるように、「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」は、近代以前からの結婚や恋愛に関する中心的な考え方であった。

ロ　物語論から考えると結末は重要視されるものであるが、九〇年代以降でも七〇年代の恋愛物語と同様のことが成立する。

ハ　七〇年代の雑誌記事は物語論でいう「結末」を重要視するが、結婚に至るまでのプロセス、すなわち「中間」の段階の魅力も強調している。

ニ　九〇年代以降、「感覚的なものの類似」が異性の新たな魅力として加わったことは、恋愛のプロセスを重要視するようになったことと結びついている。

（二）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

アムール川の人々は狩猟・漁撈（ぎょろう）の生業において生き物の皮を恵として頂き、繊細な技で剝（は）ぎとり、伝統の文様で装飾してきました。「魚皮衣」文化圏では、魚種として主にコイ、ナマズ、サケが用いられます。なかでもサケの皮は衣をつくるのに最も広く用いられました。鮭皮は厚く弾力に富み丈夫で、色は五彩に輝きます。ニヴフ族の例では女性はコート用に一〇〇匹のサケの皮を用意し、塩水で皮膚を洗う前に肉をかき取り、皮を乾燥させ、叩き、魚皮や筋からつくった糸で縫い合わせます。装飾された魚皮衣は晴れ着です。狩猟とともに漁撈で魚と生きてきた人々の最高の服飾です。

魚の皮膚である魚皮衣の表面は、[1]人間と自然を隔てるのではなく、繋ぐ皮であると考えられないでしょうか。特に人間自身が、からだに纏（まと）う魚皮は、シベリアにおいて人間界と自然界の交流・交換の接触面であることは確かです。フランスの民俗学者E・ロット＝ファルクは『シベリアの狩猟儀礼』（一九五三年）で、シベリアの少数民族の狩猟文化における人と動物の未分化の観念を紹介しました。人間と動物は（外皮は異なれども）中身は同じで、動物は喜んで自分の皮を脱いで、人の姿にもなる。虎は、からだをゆさぶって皮を脱ぎ、それを棒にひっかける。その逆もあり、人間の魂は、好みしだいで熊や虎や黒テンの皮を自在に着る。人間の姿をとっても、動物たちはそれぞれの性格を維持している、といいます。自然界と人間界が、一枚の皮を介して浸透率を高め、交流・交感・交換が可能となるのです。人間は動物の皮を纏うとき、動物界＝自然界に参入できる。生命の［A］としての皮への崇拝が神話に語られていると解釈することもできます。

ヨーロッパでは、フランスの精神分析学者ディディエ・アンジューの理論（『皮膚―自我』一九八五年）のように、皮膚は「（人間の）自我」として読み解かれます。が、シベリアやイヌイットの神話的思考は、その皮・皮膚は肉を包んで固定されている（縫い付けられている）のではなく、纏うことと脱ぐことが自在です。皮膚は私のものであるという近代人の一義的な信念に対して、交換・反転の感動を語り、自我を表／面に開いて、大自然との生命的交流を前進させていくという観念を示しているといえないでしょうか。

動物の領土では、動物が人間になり、人間が彼らの獲物になる。この獲物、人間を食う者（動物たち）は、（人間がおこなう）熊祭りをそっくり真似た儀式をやる。動物は喜んで自分の皮を脱いで人間の姿にもなる。狩猟は野生に死をもたらす、ゆえに人々は、他我のどちらにも対称的にもたらされる生／死への畏れ敬いを、人間と動物の反転という臨界において観念し、それが皮に表象されているといえないでしょうか。人間と動物の入れ替わり神話は、人間と動物は生死のあいだに存在するもの同士として――運命によって食うか食われるかのあいだに存在する――生きもの同士として交流し、その交点が皮なのだと伝えているのです。

これは近代ヨーロッパ人にとっては、文明の遅れによる原始的未分化の観念であって、存在の二重性の現れと映ります。が、そこにこそ近代人には想像できない、大自然の脅威を知る先住の人々の思考がありました。それは生きとし生けるものたちを包み込む自然はまさに未分化なのであり、［B］と［C］のドラマをみせる驚異であることを熟知していることから生まれた知でした。シベリアの人々にとって自然・野生への心的距離は篤い近さが際立ち、魚皮衣の芸術に発光しています。我と他の交流面としての皮は、アンジューのいう生／死の境界である。とともに、魚皮衣は死を予め孕んで生まれてくる生の定めを表象し、その臨界で発光している「皮＝衣＝被覆＝皮覆」であるのです。

一六世紀、ウラル山脈の彼方からロシア人がシベリアに入り、先住の人々を使役して毛皮のために動物を狩る時代になると、大量の獣皮がロシアに送られ、西洋文明によって狩られた熊や鹿や魚という野生の「死の皮」は、皇帝や貴族の権威と富のドレスとなりました。シベリアの毛皮の流通は、西洋的な人間の世界の近代経済システムの発展と軌を一にし、毛皮市場において高値で取引されました。ロシア人の人間の世界は、シベリアの動物の皮を引き剝がし、自然の世界を分断して、投機によって生命を殺して財を産む経済システムを謳歌したのでした。

しかし西欧人の富に変換させられた皮衣が物質的価値ではなく、ほかになき生命の尊厳の表象であることを、先住の人々は語り続けました。生命維持の皮を脱がされ殺傷される「死の皮剝ぎ」は、「誕生の皮脱ぎ」との[2]両義を厳粛にも表象し、驚異の反転的価値をもっていることを、です。

＊死と生を究極として起こるこうした反転作用は、しかし先住の人々が持つ観念であるばかりでなく、人間が自己形成の黎明期に、「分化し個体化するエディプス期に先立って、未分化で反転可能な幻想を経験する」ことを『皮膚―自我』の著者アンジューは指摘しました。「母の腹のなかの子供そして子供の腹のなかの母の幻想」のように、「包みつつ包みこまれ、器でありつつ内容物であるという独自のトポロジーをそなえたもの」で、「包みながら呑みこまれる」相互的な反転は、私たちが忘れているだけで、現実の社会に生きているのだと（『皮膚―自我』渡辺公三の解説による）。

その意味で先住の人々の生に現前している反転する皮と未分化の交流の観念は、人類の根源的な記憶であると同時に、太古であれ現代であれ、誰にでもありました。しかし、西洋近代はそれを恐れ、忘却しようとしました。

自然を完全に征服しようとする西欧近代の身体に纏われるために商品となった（毛）皮は、分割して統治されるべき世界から奪うことができた戦利品（トロフィー）のメタファーにすぎません。が、ナナイやニヴフの人々のアムール川の皮衣は、自然界と人間界が連続する分節されない世界を表し、表面の装飾はその交流を促し活動させる［D］として表されたのでした。シベリアの渦巻文様は、この魚皮衣にも表され、その動的運動を表象して来たのです。

皮が単なる防御の外皮ではなく、霊魂を包む皮であることは、このような伝統の装飾によって逆に暗示されます。つまり装飾とは、芸術が未生の現在に胎動し、来るべきものを生む（そして来るべきものとして生まれる）ように、本体から引き剝がされた死の皮に、渦巻の装飾を施すことによって生き還らせ、元の動物の生命時間以上の時間を付与することができる。自然と人間、野生と文明、彼岸と此岸という相互を分離する面ではなく、皮膚が、装飾によっていっそう輝くものとして生まれ変わるのです。

北西太平洋岸先住民の文様・図像と神話・習俗を調査したアメリカ人類学の父ボアズも、アムールの諸部族の衣装を調査していました。「人々が常用している皮製の衣服、とくに祝祭の時に着られる衣服はアップリケや彩画で美しく装飾されている」と記し、施されるオーナメントのリズミカルな連続性に注目しました。ボアズは分節されえない生命循環の形象をその装飾文様に目撃したのでした。

ではこの装飾の細胞・核となっている文様とは何なのでしょうか。

それはシベリアでは、①呪的な力をもち、②人類を懐く大自然を最高度に縮減して表した極限の形象です。大自然から人間が認知するものは生命であり変化・変動であり死ですが、文様はそれを循環させる護符のような力をもつ形象（抽象）であり、大自然というマクロコスモスと対応する装飾というミクロコスモスです。ナナイやニヴフの人々は西洋美術のような具象を描けないのではなく、高度な抽象化によって、天象も動植鉱物も、極限の形象（文様）で再創造できる人々なのです。

実際ナナイやニヴフの人々のサーモン・スキン・コートには渦巻のオーナメントが施され、そうした文様の力[3]によっていっそう光を帯びる晴れ着となってきました。ここに、人類史における「装飾／芸術」の発生のひとつの根源が浮かび上がります。

野生から人間の手に懐かれた魚皮や獣皮の平面・表層・皮膚は、動植物の生命がオーナメントとなって表面を飾り、そこにいっそう活発なインターフェースを生んでいく。元は一つの個体に属していた皮ですが、それが美的な交流面となって生きなおす。魂を包む生きとし生けるものの皮は、［　E　］を伝えてきたといえるでしょう。

（鶴岡真弓「ホモ・オルナートゥス：飾るヒト」による）

問九　傍線部1「人間と自然を隔てるのではなく、繋ぐ皮である」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　人と自然界の動物は姿形こそ異なるものの、皮を着脱することを通じて互いの世界へ入り、同じ命ある存在として交流していると考えられるから。

ロ　個々の生き物が皮という境界を越えて互いに浸透しあい、それらが合体して一つの生命となり、共生を図っていると考えられるから。

ハ　自然界の動物の皮を纏うことによって、人間が持っていた自我の境界を取り払い、その動物の生命と同一化して自然に溶け込んでいると考えられるから。

ニ　獲物として自然界の動物の生命を奪うことへの贖罪の気持ちから、人間がその動物の皮をかぶって命を吹き込み、霊魂を慰めていると考えられるから。

問十　空欄［　A　］に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　調整弁
ロ　分岐点
ハ　境界面
ニ　保護膜

問十一　空欄［　B　］と［　C　］に入る組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　B　混沌　C　転生
ロ　B　再生　C　交感
ハ　B　変化　C　輪廻
ニ　B　反転　C　循環

問十二　傍線部2「両義」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　殺された生き物は自然界との繋がりを失うが、人間がその皮を纏って変身することで、再び自然界との繋がりを取り戻す。

ロ　剝ぎとられた皮は生き物の死を意味するが、生死と彼我が入れ替わる境界と捉えるならば、皮を脱ぎ新たな生を得る過程と見なせる。

ハ　自然界の生き物は人間を襲う害獣だが、狩られて毛皮に変わり高値で取引されることで、富をもたらす有益な存在ともなる。

ニ　殺された生き物にとって剝ぎとられた皮は自らの死を意味すると同時に、毛皮としての新たな生命を手に入れることを意味する。

問十三　空欄 D に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　霊験的なものの黙契

ロ　感覚的なものの投影

ハ　永続的なものの具現

ニ　生命的なものの増幅

問十四　傍線部3「文様の力」とあるが、文様に対する筆者の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　多くの生き物が生まれては死ぬ自然の生命の連続的な営みを文様として表現することで、生死の循環を生み出すことができる。

ロ　必ず死ぬ運命を恐れた人間は、悠久の歴史を持つ自然の姿を文様にして身に着けることで、永遠の生命を得ることができる。

ハ　人間にとって圧倒的な力を持つ自然は畏怖の対象だったが、自然を文様という形で表現することでその力を制御することができる。

ニ　自然の姿をかたどった文様を護符として身に着けることで、生き物を殺傷する人間は自然界からの逆襲を避け安寧を保つことができる。

問十五　空欄 E に入る最も適切な八字の語句を、＊印以下の本文の中から抜き出して、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問十六　本文で示されているヨーロッパまたはシベリアの「皮衣」の説明として**適切でないもの**を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　ヨーロッパでは、皮衣が流通市場において売買される対象となる。

ロ　ヨーロッパでは、皮衣が人間の自我を表象する皮膚と見なされる。

ハ　ヨーロッパでは、皮衣が自然を征服したことを比喩的にあらわす。

ニ　シベリアでは、皮衣が身を包むだけでなく自然との交流をかたどる。

ホ　シベリアでは、皮衣が生命の交流を象徴しその観念は現代にもある。

ヘ　シベリアでは、皮衣が死を意識しつつ生を謳歌する存在を意味する。

（三）次の文章は、『別本八重葎』という物語の一部である。この作品は、『源氏物語』において、須磨・明石での退居を終えて都へと復帰していた光源氏の訪れを待ち続ける末摘花をめぐる物語の別伝として仕立てられている。これを読んで、あとの問いに答えよ。

いかなるべき世にか、かかるA=ことを待ちつけたてまつらんと、月の光の土の中に隠れたらんやうにて、高きも卑しきも、ほどにつけつつ、嘆きあへるを、かうて再び立ち帰らせたまへば、かぎりなき世の喜びに言ひさわぐを、おのづから漏り聞きて、

「さりとも、1あはれなりし御心ざしの名残なからんやは」と、人々も頼みきこえど、みづからも人知れず下待ちおはしますに、ほどふれど、つゆばかりの御訪れもなし。

例の御物恥ぢには、恋しや、つらしやなど、うち出でて、人には語らひたまはねど、げに頼みがたきは人の心なりけりと、さすがにやうやうおぼし知らるるB=に「道もなきまで」など、心ひとつにうち眺めさせたまふべし。

遠き所におはしましけるほどこそ、ことわるかたにも慰めつれ、年頃の積もりも、取り返し堪へがたう物わびしきに、「さは今はかぎりなめり」など、例の心短き老人どもの、うちひそめくを聞かせたまひて、げにとおぼすに、いみじう心細し。

十月十余日ばかり、時雨うちして、木枯らしになりゆく風の気色、山里の心地して、ものさびしうあはれなり。いとど何ごとにかは紛れたまはむ。日一日つくづくといたく眺め暮らしたまふ。

さるほどに、大弐の甥に三河の介なる者、この侍従に語らひつきて、時々ここに来通ふが、暗うなるほどに入り来て言ふやう、

「ただ今こそ権大納言殿は、この御門過ぎさせたまへ。2さもふりがたき御やつれ歩きかな」など言ふに、さはまことに忘れはてさせたまひけりと思ふにも、なほこの三輪の山ぞ悲しかりける。

されど、ひたぶるにうち捨てさせたまふとはなくて、おのづから紛れ歩かせたまふやうもやあらん、なかなかおし籠めて、つれなしづくらんよりは、これよりおどろかさせたまはば、めづらしきに、さて靡きもしたまはむかしなど、よろづに思ひめぐらして、姫君をそそのかしきこゆれど、さらにaおぼしもかけたまはず。

「わが身は、かう数ならぬ者にて、3人の御忘れ草をまかせきこえむこそめやすからめ。あいなうさし過ぎたりとおぼされんが、わりなきこと」とのたまはせて、いよいよ御顔引き入れつつおはしませば、「遠く行き過ぎさせたまはぬほどに」と急ぎて、

4小夜時雨ふりにし里をいとふとや空ゆく月のかげもとどめぬ

と、介して言ひ懸く。

御車はやや行き過ぎぬるに、追ひつきて、「大夫の君やb候はせたまふ。ここに執り申すべきことなん」とて、気色を取りて、伝へきこゆれば、

「げに昔分けさせたまc ひし浅茅が原ぞかし。あはれ、いかに荒れまさりつらん」とて、御車に御覧ぜさす。

「げに年もへぬるを、今は肘笠のたよりに、託ち寄らんもいかにぞや。うひうひしくさすがなるd心地するを、かれより進み来つるも、ただならずをかしうもあるかな」などのたまはせて、御車引き入れさせたまふ。

やや深う入る所なれば、御前の人々、指貫の裾引き上げつつ、草の露を分け煩ふ。月暗ければ、松多く参りて、南の渡殿にさし寄す。

侍従、さりやとかつがつうれしきものから、人わろく爪食はるれど、けざやぎて円座さし出づべきにはたあらねば、御座所など引き繕ひて、入れたe てまつる。大殿油参りたれど、馴れる姿も恥づかしとて、屏風のはざまに寄りおはさうず。

さる折しもよ、姫君、御胸いたくおこりて、悩ませたまへば、「いかさまにせん」と、5あきれたり。

例は、さやうにおどろおどろしき御悩みなどもことになきを、いみじう苦しげにせさせたまへば、人々、御押さへや何やと、惑ひさわぐ。

あまりほどあらんもかたじけなければ、侍従ゐざり出でて、いささかうちふるまふものは、大殿油ふと消えにけり。

かかるほどに、この老御達の中に、里より来通ふ童の、昼つかた率て来たりける犬の、下屋のもとに臥したるが、灯の光を見つけて、おどろおどろしうとがむるに、御前の人々怖ぢ惑ひて、逃げ散り、御簾引きかづきなどす。

夜声ものさわがしきに、介いみじう制すれど、なほらうらうと、いと高う吠えかかりて、この渡殿に寄り来れば、「あなや」と言ふままに、御車遣り散らして、皆逃げ失せぬ。

注　この侍従…末摘花（姫君）に仕える側近の女房。
権大納言殿…光源氏（男君）。
三輪の山ぞ悲しかりける…「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」（古今集・雑歌下、詠み人しらず）などに拠って、末摘花の邸宅で目印となりうる杉の木立がうまく目印たり得なかったことをいう。
大夫の君…光源氏の従者、惟光。
松…松明。
爪食はるれど…きまり悪くてはずかしいけれど。

問十七　二重傍線部A・Bの助動詞があらわす意味として最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　受身　　ロ　可能　　ハ　自発　　ニ　尊敬　　ホ　存続

問十八　傍線部1・2の意味として最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

1　イ　男君はしみじみ趣深いご意向をお持ちであったが、それをもったいないと考えずにはいられまい。
　　ロ　男君は同情的なお心持ちをお示しであったことから、その影響をまた受けてしまうのではないか。
　　ハ　情愛の深かった男君のお気持ちが、その片鱗までもなくなるということはまさかあるまい。
　　ニ　すばらしいお考えを思いつかれた男君なので、すっかり頼りにしてもよいのだろうか。

2　イ　いつまでも落ち着きなく歩き回っておいでだな。
　　ロ　かつてと変わりないお忍びの外出であるな。
　　ハ　老け込んではいないが見栄えのしないお姿だな。
　　ニ　老人でもないのによろついていらっしゃるのだな。

問十九　傍線部3「人の御忘れ草をまかせきこえむこそめやすからめ」とはどのようなことをあらわしているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　男君が私をお忘れにならないよう、こちらから頼りにしている旨を伝えることが肝要であろう。
ロ　男君が私をお忘れになるのをそのままにしてさしあげるのが、見苦しくないことであろう。
ハ　自分が男君との思い出を忘れないように努めることこそが、安心につながるだろう。
ニ　自分が男君のことを早く忘れてしまえるかどうかが、今後の我が人生の目安となるだろう。

問二十　傍線部4の和歌の技巧に関する説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　縁語表現を用いつつ、姫君の住む里をのろわれた地にたとえている。
ロ　掛詞を用いるとともに、去り行く男君を月の光に重ねている。
ハ　時雨を姫君に降りかかる災厄に見立てて、過酷な日々を強調している。
ニ　序詞によって、男君に見捨てられてきたつらさをイメージ化している。

問二十一　波線部a～eの敬語表現のうち、敬意の対象となる人物が他と異なるものが一つある。それはどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　a　　ロ　b　　ハ　c　　ニ　d　　ホ　e

問二十二　傍線部5「あきれたり」に関する説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　あり得ないような事態を受け、まず冷静になろうとしている。
ロ　意外なことになって、どうしてよいかわからないでいる。
ハ　急病となってしまった原因を明らかにしようとしている。
ニ　この絶好の時機を逃してしまう間の悪さに、心底驚いている。

問二十三　本文の内容と合致する最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　姫君は、既に男君が都に戻っているのにもかかわらず、いつまでたっても訪れがないことから、もはや完全に忘れられてしまったと思うことにした。
ロ　侍従と付き合っていた三河の介が、あるとき男君の来訪があると予告してくれたので、侍従は姫君のもとで男君を迎える準備を始めることができた。
ハ　三河の介から、大夫の君を介して姫君方の様子が男君に伝えられたとき、男君はなかなかこの邸宅に住まう姫君のことを思い出せなかった。
ニ　男君を御座所へと招いた途端、姫君は胸が急激に苦しくなり、そのあと侍従が男君の方へ進みでてはたらきかけようとすると、急に灯火が消えてしまった。

問二十四　この『別本八重葎』は『源氏物語』から派生して作られたといえるが、次の中から『源氏物語』よりも前に成立している作品を一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　狭衣物語　　ロ　讃岐典侍日記　　ハ　更級日記　　ニ　とりかへばや　　ホ　平中物語

（四）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ（返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

人之技能有レ優劣、徳器有レ小大、不レ必ズシモ1斉一也。至レバ於趨向之大端ニ、則チ不レ可カラ以テ有ル二。同ジクスレバ此ヲ則チ是、異ニスレバ此ヲ則チ非。向背之間、善悪之分、君子小人之別、於イテ是ニ決ス矣。友ナル者ハ、所三以ニシテ相与ニ切磋琢磨シテ以テ進ムニ乎善ニ、而為ルニ君子之帰ト者也。其ノ所レ向カフ苟モ不レバ如クナラレ是ノ、悪ンゾ可ケンニ与レ之為ル友ト哉。此2母友不如己者之意。甚シキカナ矣、趨向之不レ可カラ不ル謹マ、而友之不ル可カラ不ル択バ也。耳目之所レ接スル、念慮之所レ及ブ、雖モ万変不ト窮マラ、然レドモ観ニ其ノ経営ヲ、要ニ其ノ帰宿ヲ、則チ挙アゲテ係ルニ於其ノ初之所ニ向カフ。（中略）彼其ノ趨向之差タガヒテ、而吾与レ之友ナレバ、則チ其ノ朝夕遊処之間、声薫気染、波蕩風靡スル者、豈不ラニ大イニ可カラ畏ルル哉。子張氏ニ有リ3於レ人何所レ不レ容、如レ之何其拒レ人之説、殆ド未ダ知ラ夫ノ主トシニ忠信ヲ、母友不如己者之義ヲ也。

（『陸九淵集』による）

注　声薫気染…相手のひととなりや雰囲気に染まること。
波蕩風靡…相手に翻弄されること。
子張氏…孔子の弟子。

問二十五　傍線部1「斉」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。
イ　善　　ロ　同　　ハ　謹　　ニ　然　　ホ　変

問二十六　傍線部2「母友不如己者」の返り点として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。
イ　母ニ友不レ如レ己者
ロ　母友不レ如ニ己者
ハ　母友不レ如レ己者
ニ　母レ友ニ不レ如レ己者
ホ　母レ友不レ如ニ己者

問二十七　傍線部3「於レ人何所レ不レ容、如レ之何其拒レ人」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。
イ　どのような人であっても受け入れるべきで、拒む必要はない。
ロ　どうしても受け入れることができない人は、拒まなければならない。
ハ　どのような人でも受け入れていると、どうしても拒めなくなってしまう。
ニ　受け入れることができない人であっても、あからさまに拒んではいけない。
ホ　相手を受け入れれば、自分も相手から拒まれることはない。

問二十八　この文章の作者が友人を選ぶ際に重視したものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。
イ　徳器　　ロ　趨向　　ハ　経営　　ニ　帰宿　　ホ　忠信

〔以下余白〕